文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-4-6	1972 (S47)	奥村英正（日本医科大学第 1 内科）「慢性肝炎」内科 1972;29(6); 1043-1047	慢性肝炎は、必ず肝硬変へ移行するものではなく、長期間慢性肝炎のまま経過すること、慢性肝炎は、完全治癒しにくく、一見治癒したように見えても再燃しやすいこと、慢性肝炎という疾患では、死亡しないことなどが挙げられている。	他	レ	△
5-4-7	1974 (S49)	Prince AM et al. Long-incubation post-transfusion hepatitis without serological evidence of exposure to hepatitis-B virus. *The Lancet* 1974; 2(7875); 241-246	ニューヨーク大学病院で心血管手術を行った 299 例のうち、24 週間の追跡調査を行った 204 例について報告した論文である。この報告では、204 例中 51 例に輸血後肝炎症状が見られ、そのうち 36 例は B 型肝炎ウイルス感染に伴う抗原抗体反応が見られず、また潜伏期間および臨床上、疫学上の特徴が A 型肝炎とも一致しなかったことから、A 型肝炎ウイルスでも B 型肝炎ウイルスでもない未知のウイルスの存在を指摘し、C 型肝炎ウイルスと呼称した。	他	原	—
5-4-8	1974 (S49)	上野幸久（三宿病院）ほか「慢性肝炎の経過ならびに長期予後に関する臨床的研究」厚生科学研究費　厚生省特定疾患難治性の肝炎調査研究班『昭和 48 年度研究報告』1974. p.167-170	慢性肝炎患者のうち、5 年以上経過を観察し得た 94 例について、前例の約 80%は社会復帰を果たしており、また肝疾患そのものにより死亡したものは 6.4%であり、長期的に見た場合慢性肝炎は比較的良性の疾患に属し従来一般に考えられていたよりは良好であること、しかしながら完全な社会復帰には一般に数年以上の長期を要し、10 年以上にわたり明らかな肝機能異常が持続する場合が少なくなく、慢性肝炎が難治性の疾患であることには変わりないことを記載。	厚	原	○